

『英語4技能型テストへのアプローチ』の活用実践例

—CAN-DO リストを踏まえた横断的指導を目指して—

松平 一恵

1. はじめに

2020年度から始まる大学入学共通テストを控え、英語の民間試験について新聞等で目にする機会が増えている。時代の流れやニーズに合わせて、英語でコミュニケーションを図りながら主体的にグローバル社会の中で行動する人材育成への期待はますます高まる一方である。生徒たちは、この時代の潮流を確実に感じ取りながら、自らの進むべき道を模索し、日々の学習に励んでいる。彼らは大学入試のための英語だとかコミュニケーションのための英語だとか大きく区別せずに、前向きに英語を学んでいる。英語を巡っては、科目や指導内容、さらには検定試験等、常に話題に事欠かない状況が続いているが、我々教員は、それらに敏感になりつつも、英語を一つの言語、コミュニケーションツールとして捉え、地に足を付けた指導を冷静になって実践していくべきであろう。

2. CAN-DO リストについて

岩手県内すべての高校が学校の特色や実態に応じたCAN-DOリストを作成して久しい。英語を教える教員にとっても、学ぶ側の生徒にとっても共有すべき指針として存在している。

ここでは、これからの入試や指導に向けて特に関心が向けられる発信技能、スピーキングとライティングの目標を紹介したい。現勤務校2年生の目標設定は以下の通りである。

【スピーキング】

- ① 聞いたり読んだりしたこと、あるいは経験したことや調べたことに基づき、周囲と1分間の対話ができる。
- ② 使える語句や表現をつないで、自分の伝えたいことを順序立てて、ある程度詳しく話すことができる。
- ③ 自分の考えを事前に準備して、メモの助けがあ

れば、聞き手を混乱させないように、馴染みのあるトピックや自分の関心ある事柄について2分間話することができる。

【ライティング】

- ① 聞いたり読んだりしたこと、経験したことや調べたことに基づき、情報や考えなどについて、まとまりのある文章を書くことができる。
- ② 論理的な文章構成を用いて100語程度のまとまりのある文章を書くことができる。
- ③ 読んだ英文の内容について、まとまりのある英語で要約することができる。

3. 実技試験について

CAN-DO リストは年度末に仕上がりを見るためだけのものではなく、普段から意識的に活用していくことが大切だ。授業では各レッスンの特色に合わせて具体的な目標が毎時間設定されている。そして少しずつ負荷をかけ、途中実技テストで確認しながら年度の目標に近づいていく。因みに2018年度2年生のスピーキング実技試験は、

- 1回目：あらかじめ指示された英文の音読テスト
- 2回目：初見の英文を音読後に質疑応答
- 3回目：5対5のチームディベート
- 4回目：初見英文に関する1分間のスピーチ

であった。CAN-DO リストでは最終的に2分間話すことを求めているが、メモを見ながらのスピーキングは授業でも実施済みであるのに加え、限られた時間内で公平かつ適切な評価をしていくため、4回目は上記の通りとした。一方ライティングでは、年4回のエッセイノート提出と考査試験での100語程度から120語以上のエッセイライティングを課した。

4. 『英語4技能型テストへのアプローチ』活用例

本校では冬季休業中に、『英語4技能型テストへのアプローチ』を集中的に活用する機会を設けた。

2年生はテキストの②を使用した。以下にどのように活用したのかを記したい。

(1) リスニングとリーディング

この2分野に関しては、1コマ70分の前半を解答、後半を復習とした。最も重視したのは、多様な問題形式及び話題に慣れながらテキストに登場する英文の完全理解を目指すことであった。読んだり聞いたりする英語は当然のことながら、話したり書いたりする発信英語の質に影響を与える。場面に応じた基本表現や語句を十分にインプットする絶好の素材と考え、解答冊子のみならず、「別冊ノート」の活用も促して復習に比重を置いた。テキストを満遍なく活用することにより、情報を整理して聞いたり読んだりする力、パラフレーズされた表現への着眼点などが確実に得られたと考えている。

(2) ライティングとスピーキング

発信型のこの2分野では、設定時間で生徒が解答したのち、ペアでチェックし合い、お互いのミスや表現の違いを確認しあった。これは普段の授業でも頻繁に行っている。ペアでチェックした後は、別解を含めた模範解答と自分の英文を比較し、細かい文法や使いたい表現の確認を行って徹底的にインプットさせた。単なる確認作業で終わらないよう、表現がスムーズにアウトプットできるまで口頭で繰り返し練習する時間も設けた。問題を解く時間の何倍も復習時間を確保したことはとても良かったと思っている。加えて、解答冊子にあるループリックは、生徒同士での評価が容易になり、ペア活動において非常に有効であったと思う。

5. 実践の振り返り

『英語4技能型テストへのアプローチ』による指導を振り返りたい。

(1) どの技能分野も身近な話題で構成されているため、生徒が当事者として受信型と発信型の学習を自然に行うことができた。多様な場面設定と身近な話題での言語活動は、生徒が主体的に学習を継続するために必要不可欠であることは言うまでもない。

(2) 模範解答が複数例示されている点は、生徒の表現の幅を広げることに繋がった。発信場面では、使用する語彙や英文パターンは限定的になる傾向がある。複数の解答例を用いた繰り返しの練習はインプットとアウトプットの往復になり、有意義な取り

組みだったと言える。

今回の取り組みで、表現における fluency が生徒それぞれワンランク上がったことを実感している。加えて、生徒から「インプットしたらアウトプットまでしたくなる。」という話が聞かれたり、その後の授業でもアウトプット活動を指示したときの反応が、以前に比べて格段に向上したりするなど、英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の面でも変容を感じられたことが大きな収穫であった。

6. 今後の指導

生徒が英語を活用する場面では、しばしば Fluency first. と言われる。しかし、first というからには次の段階も必要だと私は考える。second にあたるのはやはり accuracy ではないだろうか。問題→確認→練習のパターンはこれらを支える確実な手段となるだろう。他者との相互作用が理解の深化につながるペアワークを続けながら、さらに今後は論理的思考力を伴うより open-ended な問いにも対応できる力の育成を目指していきたい。もちろん、扱う内容を日常的なものから社会的な話題へと発展させつつ、どこまでが生徒同士で、どこに教員の主導が入るべきなのかについてもしっかりと考えていかなければならない。これまで以上に教員としての教材観が問われるはずである。

7. まとめ

英語学習について立ち止まって考えるとき、私はいつも自分の英語が初めて海外の方に通じたときのことを思い出す。自らの学びの軌跡は、言葉とともに広がった世界であるとも言える。私たちは人と人との関わりの中で多くを学び、知識や技能を身につけていく。そういう意味で、生徒同士の学び、教員の働きかけの一つ一つがかけがえのない実践なのだと思う。生徒が教材や活動の中で自己関連性を見出し、4技能それぞれに主体的に取り組みながら、同時に4技能の垣根を感じない、そういう学びの場を指導者として提供することができたらと思う。

(岩手県立盛岡第三高等学校 教諭)